

自然共生社会をめざして トータル・ランドスケープ計画学の研究

^{アーススケープ}
1本の木から地球環境までを扱う幅広い分野が造園である。ふつう造園人は、そのうちの庭づくりとか、公園づくりとか、自然保護とか、どこかに軸足を置いて活動している。しかし、庭や公園スケールから都市、地球スケールまで、そのすべてを視野に活動し続けてきた造園人がいる。自然や土地、歴史や文化を読み、「用」と「景」が調和した環境を実現する能力に、確かな社会性を備えた百姓こそ真のランドスケープ・アーキテクトだとの職能論を提唱、自ら「百姓の造園家人生」を歩んでこられたのが進士五十八先生である。

「オピニオン・リーダー」と呼ばれるひとがいる。特定の職能や職域、あるいは社会や時代において、将来を予測し、多様な課題を喚起し、その対処のための思想と方法の意思形成に大きな影響力を有する人物である。進士五十八先生は環境学・造園界の代表的オピニオン・リーダーである。しかし進士先生は、作庭家から見れば日本庭園の、行政マンから見れば公園やまちづくりの、理工学の研究者から見れば自然環境保全系の専門家というように、多くのひとは自分と関係する特定分野での先生しか知らない。そこでここでは、先生の全体像が理解できるような小文にチャレン

ジしてみたい。進士先生は「どんなことも、みんな造園だ」とおっしゃる。ランドスケープの対象がいかにも広範だとわかるのは、先生が係られた審議会や学会長など。観光審、都市計画中央審、河川審、北海道開発審、国土審、中央防災会議、社会資本整備審、自然再生専門家会議等々。また造園学会長、都市計画学会長、東南アジア国際農学会長、レク学会常任、野外教育学会長、生活学会長、GCHERA日本代表、社叢学会副理事長、自治体学会代表等々。これだけ広範だと当然、付き合う人はまったく異り、先生のお仕事をすべて理解しているひとはいないだろう。庭園、

公園、都市、田園、国土、地球へと、造園・ランドスケープのすべてに対して、その思想と方法を深化させ、社会の要請するさまざまな課題に積極的に取り組んでこられた稀有の造園家、それが進士先生である。進士先生は、Landscape Architecture (近代造園学) が標榜するトータル・ランドスケープの研究者かつ実践者である。いわゆる重箱の隅型研究者の対極のひと。いくつもの、そしてさまざまな形が組み合わさった、かぎりなく球体に近い多面体である。その多面体からは、P V E S M (Physical・Visual・Ecological・Social・Mental) による「アメニティ・デザイン論」とか、「安定空間論」を基礎として自然・社会・文化の多様性によって持続可能な地球社会を目指す「ダイバーシティ理論」(バイオ・ダイバーシティ、ライフスタイル・ダイバーシティ、ランドスケープ・ダイバーシティ) といった、誰もが納得できる明快な造園原論が放射される。オピニオン・リーダーよりも「オピニオン・メーカー」が、適切かもしれない。ひょっとしたら「進士五十八」という名前そのものが、ひとつの職能だといってもよいかもしれない。



進士先生と筆者、東京農大初代学長 横井時敬先生胸像と (2013年7月撮影)

現代日本のトータル・ランドスケープを目指す進士造園学へ

進士先生は昭和19年4月8日、京都は大徳寺のある紫野、船岡町で生まれた。日本の都市計画史上、数少ない受益者負担公園—船岡山公園のある街だ。当時は太平洋戦争の渦中。親の里福井県の吉川村（現在、鯖江市吉川町）にほどなく疎開。小学校生活のほとんどを越前平野のド真ん中の小川や田んぼで遊び育つ。小学校高学年の夏休み、東京都江東区深川三好町に引っ越す。このように先生は、古都京都に生まれ、越前平野の田園、江戸東京の下町、そして結婚後現在までお住居の昭和10年代小田急の開発による南林間都市（大和市）と、それぞれ異なった地域生活を体験している。このことが、「地域らしさ」のある空間や景観の重要性を体感できた理由かもしれないと述懐されている。

東京に移った進士少年は、富岡八幡宮や深川不動尊の縁日、路地園芸、木場の掘割に浮かぶ材木の匂いや風景、浅草の寄席や剣劇に触れ、下町気質に染まっていく。同時に「大東京祭」共催行事の絵画コンクールに毎年特選入選の絵の得意な少年でもあった。小学校は深川の元加賀小学校。震災復興小学校のひとつで、それと一体の元加賀公園が格好の遊び場。井下清率いる東京市公園課設計の震災復興52小公園のひとつだ。後、進士先生は、その井下清から、直接教えを受けることになる。

次いで進学した江東区立深川第六中学校では理科クラブに入り、化学の実験の面白さに目ざめる。理科好きの少年は東京都立化学工業高等学校（化工）に進む。戦前は旧制の専門学校で、吉本隆明、4代桂米丸、花王石鹸の創始者らを輩出した化学の名門校だった。工業化学科では無機化学、有機化学、定量分析など実験に明け暮れた。成績トップで化工を卒業した進士青年は、国産の塩化ビニリデン樹脂製造特許技術で知られていた呉羽化学の東京研究所に就職。高卒でも研究させてもらえる会社といわれて入社したもの、すでに会社は世界と闘う石油化学工業に進出、研究はドクターの主任研究員が計画を立て、高卒所員は実験のオペレーターにすぎない。指示された方法で実験に当たる日々、進士青年は学術として完成されすぎた化学の巨大な世界に次第に無力感を覚える。実験中に失明が危ぶまれるほどの事故も経験し母親に心配をかける。そんなとき、両国から大久保の研究所に向かう通勤途中、車窓から浅草橋辺りのビルの屋上に庭園がつくられていくのを眺め新鮮な気持ちになる。

「そのうち建仁寺垣がつけられたり、植栽が施されたりして少しずつ形できていく。怪我して悩んでいたところで、もともと絵が好きだったこともあり、日本庭園を作ってみたく思ったのです。」

いろいろあって、昭和40年4月東京農業大学農学部造園学科に入学。大学入学直後のワングル事件で知り合った同期生の井上剛宏、涌井史郎らとサークル庭を結成。庭園の本質とは何か、日本庭園の形の必然性や造形をもたらす条件は何かなど、喧々諤々の議論を重ね、京都で合宿もした。

そしてもうひとつ大きな出会いを東京農大で



進士先生の原風景のひとつ、東京の下町、深川木場の掘割（栗田光男撮影、1973年頃）



ダイバーシティからのランドスケープ論を講演、IFLA 世界大会キーンノート（中国蘇州、2010年5月、65歳）



農大生時代の進士先生（桂離宮の月見台で、21歳）



恩師の江山正美教授と進士先生（31歳）



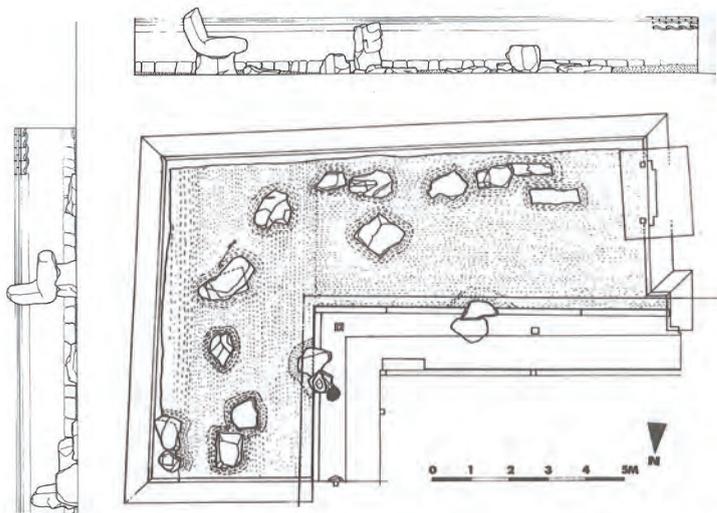
NHK 教育テレビ「視点・論点」で数年間ランドスケープの話題を解説（57歳誕生日の放送）

得た。近代造園学—ランドスケープ・アーキテクチュアの可能性を説き、造園の科学性をうたえる「江山造園学」、すべてに深く広い教養を実感させる大系「上原造園学」であり、市民生活と時代的要請への実学（プラクティカル・サイエンス）の重要性を教える「井下造園学」である。

「現実問題を解決するのが実学です。理学は、原因を分析するが、解決方法は提示しない。造園は実学でなきゃいけない」と進士先生。

先生の造園学の根っこは、造園史および造園原論にある。「未来を読むための学」としての造園史と、「環境計画の哲学」としての造園原論だ。フィールドは庭園、公園、都市、田園、国土と広いが、先生はすべての空間は連続したランドスケープだと考える。基本は土地・自然、それが対象空間によって様相がちがう。だから問題の本質を見極め解決方法をどうするか、ひとつひとつ工夫しなければいけないと考える。それでも、先生のなかでは「それぞれが有機的に関係あい連続しているのがランドスケープの本質であって、いつでもその全体像を持ちながら総合的に構想しなければならない。」のだ。このトータル・ランドスケープを夢におおわせないために、大学退職後も元国交省事務次官青山俊樹氏らと設立したNPO法人美し国づくり協会理事長を引き受け、その実現を目指しておられる。ただそれ

だとそこでの思想や方法を、説明しにくいので以下便宜的に、庭園学、公園学、都市計画論、農村計画論、自然環境保全計画論と分けて進士造園学の業績と特色を概観することにしたい。



江戸中期（正徳年間）のユニークな重ね石組の枯山水庭園、
進士先生ら月の桂の庭初の実測図（山口県防府市）



進士五十八先生の庭園研究の原点となった月の桂の庭

庭園学／「日本庭園の特質」研究からの理想的環境創造のための計画とデザイン思想の普遍化

進士先生の研究の原点は、「日本庭園」にある。日本造園学会にて発表された研究論文も日本庭園に関するものが一番多く、日本庭園に関する研究業績で日本造園学会賞、日本農学賞、読売農学賞を受賞され、そして紫綬褒章も受章されている。社会活動としては、保存されるべき価値のある歴史的庭園から風景までを包括する概念として「ランドスケープ遺産」を提唱され、日本造園学会にランドスケープ遺産保全委員会と研究委員会を立ち上げ、遺産の学術的な価値づけから保存方針、修復や復元の方法、管理と活用の内容について系統的な枠組みを確立された。したがって進士先生は、日本庭園研究の第一人者として、社会的には認識されていることが多いと思う。ただ、先生は40代からずっと東京都文化財庭園の保存・利用・復元・管理に対する指導助言の委員長を引き受けたり高層ビル林立から庭園景観を保全する闘いを東京都都市美委員会が発言する等、庭園文化の社会化、現代化に情熱をそそいでこられた。庭園ガイドも先生のアイデアである。

戦前の造園学研究は、日本庭園研究が大部分を占め、しかも日本庭園の研究といえば、庭の由緒や作庭家を明らかにしようとする歴史研究にとどまっていたり、宗教的な須弥山蓬莱の側面を強調したりするものが圧倒的に多かった。進士先生が学生時代に受講した江山正美教授の

授業ですら、須弥山蓬莱や極楽浄土の話ばかり。学生たちは煙に巻かれ、いかに日本庭園が深淵なものかを印象づけられる。庭を作りたい、造園デザインを学びたいと大学に入った進士青年は不満であった。

「空間論や景観論や、その手前の様式論、また社会史や時代史からですね、それから自然、風土、や土地のローカリティ、リージョナリティとの関係で、庭園デザインのあり方や技術を説明しないと、ものづくりへの造園史とはいえないですよ」と進士先生はいう。

進士先生の庭園学研究は、庭園の空間、景観、構成、構造、材料、地域をあくまでも総合的に追求しようとしたものである。博士論文は「日本庭園の特質に関する研究」(1986)で、東京農大出版会から大部の『日本庭園の特質—様式・空間・景観』(1987)が出ている。一般向け著作、中公新書の『日本の庭園』(2006)は多くの読者を得て版を重ねている。これらの研究や著作は、科学的データにもとづき、日本文化にうとい外国人や現代っ子にでもわかるよう、論理的に書かれている。この本を読むと日本庭園がよくわかる。その点、明らかに従来の庭園書と一線を画している。先生の研究では、極楽浄土に「人間の理想郷」を見出し、そこから「生きられる空間」—一生の喜びから死の平安までを見守る空間として庭園を意義つけることで、普遍的な環境共生思想や技術の原理・原則を引き出そうとする。「プラクティカル・サイエンスとしての造園学を深化させるために、まずは、造園空間の単単位

ともいうべき、にわや庭園を研究することが第一だと考えたわけです。」

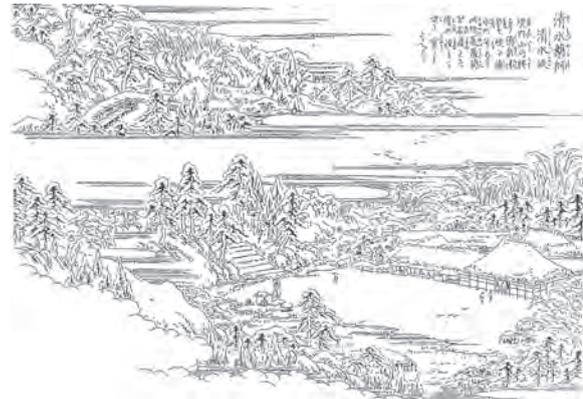
進士先生の庭園研究は、月の桂の庭のように個別庭園の測量から始まったが、江戸の大名庭園が各時代と各地域の意匠や技法を総合化したことを理論づけたり、日中韓の庭園の同一性を探ったり、日本の刈込とヨーロッパのトピアリーと樹藝を比較するなど、常に世界の庭園を相対化して、その全体像を希求してこられた。

「共通性を明らかにしていくと普遍性になります。それは本質につながります。差異性、違いは、特質につながります。ですから、京の庭と江戸の庭の特色を浮き彫りにして、「造園の地域らしさ」に注目することも重要ですし、共通性を意識して世界の庭園における「日本庭園特質」さらには「人間にとって造園の本質」を考察することもできるのです。」きわめて明快な論理である。

進士先生の庭園術の体系は、①囲繞、②縮景、③借景、④樹藝、⑤然び—エイジングの美。囲繞、縮景は空間論であり、借景は景観論。樹藝は自然と人間の関係論、エイジングの美は、経年によって表出された侘び然びで時間美論である。「空間」「景観」「自然」「時間」—これらはまさしく哲学が扱ってきた根本的で普遍的な問いである。進士先生は、庭園から環境デザインにおける哲学的普遍性を、明確に意識しておられたことがわかる。



上野公園の再生計画、哲学堂公園(左)保存管理計画、神奈川県立城山公園旧吉田茂邸園(右)復原整備計画等委員長として指導助言



江戸名所図会に登場する板橋区内唯一の名所「薬師の泉」を区立公園として復原整備、日本造園学会として都市開発の激しい時期に歴史性の復活を提案

公園学／「日比谷公園の総合的研究」から導いた利用者本位の造園計画原論・公園生活史からの公園社会学

進士先生の公園研究の原点は日比谷公園にある。ご自分の卒論以来半世紀近く日比谷公園への関心を持続され、2011年『日比谷公園—100年の矜持に学ぶ』をまとめられた。この業績で日本生活学会今和次郎賞、日本造園学会特別賞を受賞されている。

半世紀前、指導教授の江山先生から「君には日比谷公園の改造設計をやってもらおう。」と言われた、とか。当時は高度経済成長期のさなか。急速に経済発展を遂げる東京では、明治36年開園の日比谷公園を保存しようなどの発想があるはずもなく、誰もが時代遅れと考え改造設計が話題になっていたのだ。

改造計画の基礎は、歴史を調べる、現状を調べる、利用者の特性を調べる、だと考えた先生は、毎日のように日比谷公園に足を運び、園の隅々を、その利用者をマン・ウォッチングし、公会堂や公園資料館に通った。日比谷に関する記事を見つけては年表を作成した。各時代の図面も精査した。日比谷の利用者がどんな場所を選択するのかを定性的かつ定量的におさえ占有空間特性とした。

進士青年は、何よりも日比谷公園史をそれまでの史料以上に詳細に調べ上げたことに意義を感じていた。しかし江山先生は「これはただの編集だ。」と、まったく評価をしてくれず、占有空間特性だけをオリジナリティが高いと認めたそうである。当時の江山先生は、造園は絵空事だから科学

的にしないとイケない、科学的造園こそが重要だというのが信条であった。進士先生が大学退職後、改めて前出の日比谷公園の本を書かれたのは、卒論時に歴史の部分がまったく評価されなかったことが相当悔しかったからであろう。

「私が日比谷公園で占有空間特性を発見した頃、造園には計画原論がないといけないというのが江山先生の考えでした。実際の造園計画のもとになる計画原論がないし、科学的研究の基礎もない、ということだったのです。居心地がよいのはどんな場所かとか、スケールによる広がり感や距離による見え方の数値とか、地味だけど大事な分野です。」

大学に残ってからの進士先生は、「居心地の良い空間とは何か」を追求し、その計画基礎になる数値を研究することに精力をそそぐ。先生は、人間の生存環境には「安定性」が不可欠であるという「安定環境都市論序説」(1978)を発表し、その具体化のための基礎数値を実験や文献を統合して日本建築学会の全11報におよぶ「安定空間の構成に関する研究」を発表(日本建築学会関東支部研究報告集、1977-78年。)した。その副題をみると、「ペーパメントパターンのスケールの標準化」「特定空間における利用者行動と空間質の関係」「園地空間に於ける利用者の占有位置を規定する環境条件としての依拠要素」「園地空間における利用者間の安定距離の標準化」「幼児の安心行動圏スケールからみた安定間距」など、造園計画に即座に応用可能な、特に数値で指標化するという、江山先生の標榜した科学的造園を本格的に実行されていたことがよくわかる。

ただ一方で、進士先生は歴史研究も継続、たとえば東京都造園建設業協同組合の25周年記念誌で江戸東京の庭公園史を主筆でまとめた『緑の東京史』(1979)に結実している。

「緑の東京史をどう区分し、どう性格づけるかの判断とか感性や姿勢はね、学生時代からずっと井下先生のところにお訪ねしていたからできたんです。井下先生が東京都の文化財総合調査団の副団長で景観班を組織しておられ、私はその補助員として車の運転などお伴していました。ですから、体系的ではありませんが、断片的にいろいろ伺っていましたし、公園史家の前島康彦さんの論文や記事もたくさん読みました。そうすると、断片が自分の中でつながってきまして、半年しかないのにとにかく面白い本をつくりました。」

組合の役員だった箱根植木(株)の和田貞次、昭和造園(株)の前田宗正氏らに頼まれて、進士農大講師が実質的に企画編集執筆した、いわば先生にとっては著者名の入らない処女作のようなものであったらしい。東京下町育ちの先生らしい思い入れもあり、いかに東京の緑は先人の苦勞で立体的につくられてきたかを伝えようといろいろ工夫している。

表紙カバーは、幻の日比谷公園・長岡安平案の図面見開き。巻頭エッセイは江戸っ子のおふたり、沢村貞子の浅草公園、池田弥三郎の銀座の柳。そして昭和天皇の侍従入江相政の「皇居の緑」。コラム「緑の東京史余話」を70テーマ分け、当時の主な造園人が総登場という工夫もされている。

『緑の東京史』は時代区分も造園史らしい。江戸時代を「サクラの時代」、明治時代を「アカマツの時代」、大正と昭和前期を「プラタナスの時代」、昭和戦中後期を「ケヤキの時代」、それ以降を「キョウチクトウから雑木の時代」とユニークだ。これは緑を人間生活との関係から歴史的にその意味と姿を解こうとしたもので、進士先生はこの考え方をさらに「公園生活史」へと発展された。品川御殿山、横浜公園、日比谷公園・日比谷児童遊園、震災復興公園などの事例を対象に、公園生活史研究を重ね、公園の社会的役割を明らかにした。旧浜離宮など庭園史分野でも、空間史と生活史を多層に重ねて本質を捉えようと研究され、造園史研究の新たな方法論を確立されたのである。

都市計画論／人と自然の基本関係の追求からの「緑政学・緑のインフラ論」、そしてトータルまちづくりのための「景観政策」

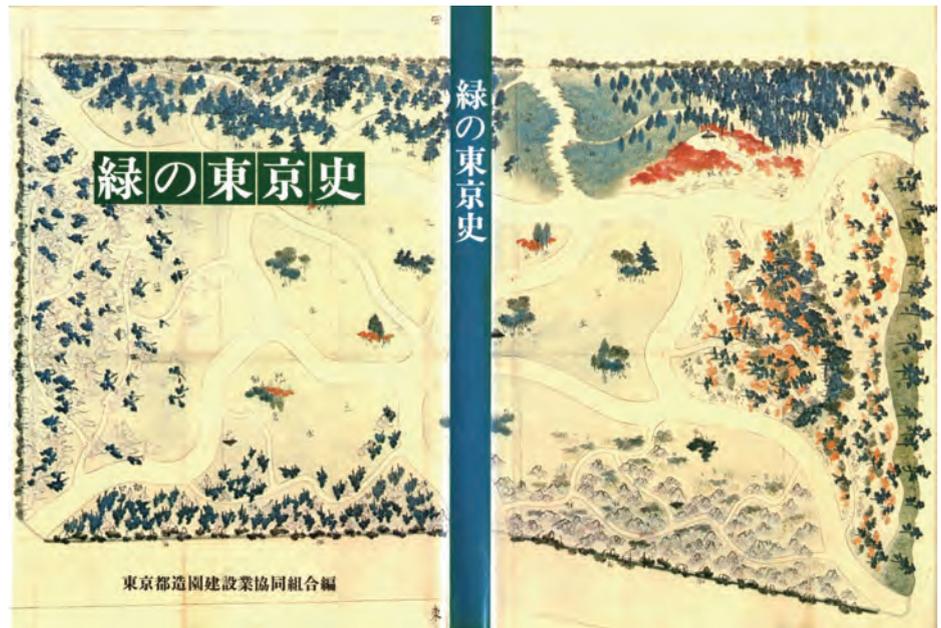
進士五十八先生は、これまで数多くの審議会・委員会で、都市計画、環境基本計画、景観基本計画、緑の基本計画を策定してこられた。

この基礎は、進士先生はまだ20代後半で助手であった頃、奥様の実家のある高崎市からの委託調査であった。高崎市役所で新しく公園緑地課が発足、どれくらい公園緑地が必要なのか、“緑化診断”を依頼された。どれくらいのみどりが必要か、というのはきわめて素朴な疑問だが、当時は誰も研究しておらず、学者の提示したものは都市計画等法律の基準などで、客観的なデータにもとづいた科学的なものではなかった。

進士先生は、都市空間を自然面(natural space)と人工面(artificial space)の二元構造とみなして「NA形率」という概念を提起し、空中写真を300mメッシュ単位で区分、自然面率を計測。一方で各メッシュに対応する1300世帯の市民の緑充足意識をアンケート法で調査。その相関を分析した。(東京農業大学造園計画第一研究室「高崎市緑化診断報告書」、高崎市緑化運動推進委員会、1973年)。結論は、居住環境における自然面率は標準として50%、最低でも40%、できれば新たな都市開発では60%を確保することが理想であると「進士のグリーンミニマム論」を提案した(『住環境におけるグリーンミニマムについての研究』造園雑誌、38巻4号)。

「高崎市は事務系の担当課長だったので緑は何故必要か、どの位の量があれば良いのか?と問いかげられたら良かったのです。造園家はなまじ緑のことをわかっているつもりだから、6㎡/人で納得してそういう疑問すらもとうとしない。専門家が、心すべき点だと痛感しましたね。」

進士先生は、都市緑地4つのネットワーク理論(オープンスペースネットワーク、ランドスケープネットワーク、エコロジカルネットワーク、コミュニケーションネットワーク)として提案。具体の計画委員会では、コンセプトメイキングからプランニングの実際までされている。三鷹市「4つの里構想(牟礼の里、大沢の里、丸池の里、北野の里)」と回遊ルートづくり、「三島市菰池公園・水上プロムナード、源兵衛川プロ



上は幻の日比谷公園岡安平設計図案を進士先生のとりにまとめた「緑の東京史」(1979)の表紙としたもの、下は進士先生の日比谷公園研究の総まとめ「日比谷公園」(2012)の表紙(本多静六の実施案)

ムナード計画」、「東京都景観マスタープラン」、「多摩川エコミュージアム構想」、「練馬区水辺ふれあい計画」、「浜松市緑の基本計画」などのほか、いま現在も「横浜市みどりアップ計画とみどり税」を審議会長としてリードしている。ここで特記されるべきことは、先生は田村明、伊藤滋といった都市計画家と共に、自治体学会代表運営委員(2006-2012)、中央防災会議委員や森記念財団理事をつとめるなど、また日本都市計画学会会長などとして、さらには横浜、川崎など政令市の環境審議会長として、また長野県や三

鷹市、新宿区、江戸川区などの景観審議会長として行政現場で、ランドスケープ思想の普及につとめておられることである。そこでの識見の根底には、緑政学の研究、緑のまちづくり学の出版にみられるような“人間と自然の関係”への深い考察の積み重ねがある。

ところで先生は平成10年の研究室体制の改組の折、「景観政策学研究室」を立てられた。土木・建築分野からの景観論に対し、ランドスケープ(土地・自然)に立脚点を置く造園分野から、自然景観、田園景観、都市景観、歴史景観の計画





進士先生監修の三鷹市緑と水の回遊ルート計画と4つの里構想。先生は、現在東京都三鷹市の景観審議会長であるが、それまでのまちづくり委員会委員長として都市マス「緑と水の公園都市・三鷹」の策定、その前の「緑と水の回遊ルート計画」を構想された



三鷹市4つの里の1、大沢の里、野川



三島熔岩（地場材）と湧水を生かした三島市の源兵衛川プロムナード（土木学会デザイン賞受賞）

と政策を連続させながら研究しなければならない、との思いからで、研究教育にエネルギーをそそいでこれ、後進の先頭に立たれた。著書『風景デザイン』はその中間報告のようなものであるが、ここでも先生は「景観論」「風景論」「風景デザイン論」の3段階論で本質に迫っている。先生独自の思考法、「段階論」的アプローチの典型例である。

農村計画論／百姓のデザインを再評価した「ルーラル・ランドスケープ・デザイン」を提案、「農」あるまちづくりを本格化

進士先生が強く“農”—アグリカルチャアの重大性を自覚されたのは昭和40年代からの都市内農地の宅地並課税へのマスコミ攻勢が契機である。戦後の高度経済成長下、美しい都心づくりが「アーバンデザイン」の名で展開する。広場や街路は工業製品でペープされ照明やベンチなどストリートファニチュアでデザインされ、彫刻が飾られ、かっこいいともてはやされた。当時、文化行政に係わり、横浜市ともつきあった進士先生は、自然循環の視点の欠如、無機的美化の点で危機感を覚え、「アーバンデザイン」に対し「郷土設計」というオルタナティブを提案す

る。それが『緑からの発想』(1983)のサブタイトルにもなる。

「横浜市の森清和氏と都市自然研究会を立ち上げ、『国立公園』誌に生命第一で安定性のある環境づくりが最も基本ってことを、言い始めたのが最初です。『生物人間にとっての環境デザイン』ということです。それはアーバンデザインへの対比概念として、緑—自然美や循環共生など、さらに人工化・画一化に対して地域性・郷土性をもたせるべきだというオルタナティブを提案したのです。アーバンデザインという英語に対比させ、土くさを強調して漢字で郷土設計としました。」

進士先生はこの郷土設計の思想をさらに推し進め、『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』(1994)で「百姓の環境デザイン」を標榜してゆく。思想を普及するには技術書の出版が不可欠だと感じていたからである。この本をまとめるべく、進士研究室を巣立った第一世代で「RLD研究会」(平成2年)を発足、継続教育の意味もあった。全国各地の棚田、石積、用水、畦畔、屋敷林など田園景観構成について調査、地場材を使ったデザインや伝統工法が、地域らしさとぬくもりのある環境創出に非常に重要と結論した。

進士先生の立場は平成5年からは東京農業大学総合研究所長、平成7年には同大学農学部長、そして平成11年には同大学長に就任され、平成17年までつとめる。その間「造園」以上に、「農」の現代的意義を主張する“進士”として社会的認知が高まってゆく。著作においても、「都市になぜ農地が必要か」(1996)、「都市、緑と農—「農」が担う地球の将来」(2000)、「『農』の時代—スローなまちづくり」(2003)など、「農」を前面に打ち出したものが多い。

先生の頭では、東京農大や農業のためというよりは現代社会の都市病理を解決するには、「農」—Agricultureの多面的機能や「農」の文化的意味、「農」の風景の再生しかないという切迫した思索が深まり、また昂っていたのだろう。そうした思想の運動化として、『環境市民とまちづくり』全3巻(2003)自然共生、環境共生、地域共生編の出版。さらには、市民の“農”との付き合いの勧めとして、ハーブガーデニング、バケツ稲、アニマルセラピー、地場野菜無人スタンド、菜園付住宅、観光果樹園などなど「緑地生活」を提案している。「精農、楽農、援農、遊農、学農」(1993)あるいは、「全国民総第五種兼業農家化」(2003)などのスローガンを掲げ、都市社会に居住する多数派国民に「農」をおもいきり近づけようともされた。『グ





広島県、下蒲刈ガーデンアイランド構想マスタープラン

リーン・エコライフ』(2010)は、その集大成であり、市民に向けた先生のメッセージである。先生は「農」と東京農大と造園の社会化戦略を展開するアイデアマンであり実行者でもあった。

自然環境計画論／国立公園計画から環境保護思想へ—自然共生社会の創生に向け諸分野の環境学者を糾合

進士先生が助手のころは、江山先生が厚生省国立公園局出身だったこともあって、また当時の造園界には設計事務所しかなかったので、国立公園計画などは大学の研究室に舞い込むことが多かった。疎開先福井県の東尋坊環境整備計画(1971)からはじまり、吉野熊野国立公園の拡張計画(1972)、蓼科自然共生リゾート計画(1972)、大山地域の野外レクリエーション計画(1974)、霧島国立公園広域計画(1974)などの

国立公園計画、また鳥取砂丘観光計画と北茨城市観光計画(1974)の受託など常時4つ程度の仕事が同時並行で進んでいた。このころ進士助手は、シュラフで研究室に寝泊まりする毎日であった。進士先生は、仕事をしながら考えた。計画実務をおこなうのみならず、それを研究レベルにしなければとプロジェクトに当たった。たとえば「収容力」調査、国立公園の利用者人数の適正規模、また各種の利用形式にともなう施設配置の適正数量について、標準化しようというもの。これは環境庁からの受託「自然公園における収容力に関する研究」(1973)となり、その成果は日米国立公園会議に報告された。次いで「自然風景地における建築デザインの基本に関する景観的考察」(1975)、「自然景観地における色彩基準に関する研究」(1981)など国立公園内の風致維持のための審査指針の受託研究をまとめる。また進士講師は、「観光」誌などの論考も注



朝鮮通信使の島、下蒲刈島の活性化構想(1990年)日本政府の「ガーデンアイランド日本」の10年以前に進士先生が構想した「ガーデンアイランド下蒲刈」、熊本アートボリスの造園版で8人の造園家に新下蒲刈八景のデザインを委嘱、完成、「庭園の島」にまとまる

目され、政府の観光政策審議会最年少の専門委員としても活躍、「わが国における野外レクリエーションに関する計画論的考察」(1982)など精力的に発表した。こうした活動と、「保護と開発の調和手法」の業績が国立公園協会の第5回田村賞受賞(1984)になった。

人間と自然の関係のあり方に対する洞察と画家としての実際の対応への思考が、『自然環境復元の技術』となり、政府の自然再生推進法制定への応援となった。こうした先生の柔軟な自然保護論は、自治体の環境基本計画の策定、さらには生物多様性など地域環境問題への企業も含む国民的関心と、里地里山の保全利用計画、そして自然共生社会へのオピニオンとしての期待を高めている。現在も環境省・農水省・国交省共管の自然再生専門家会議委員長はじめ国土審、社会資本整備審などで環境や景観系委員として、また日本学術会議会員・環境学委員長(第20・21期)として広く諸分野の環境学研究者をコーディネートし『地球社会の環境ビジョン—これからの環境学』(毛利衛・進士五十八編、2013)をまとめるなど、環境学の要の位置にある造園学の意義を体現しておられる。

以上、本文では先生の研究を中心に述べた。ただ実学主義の先生の造園学は、行政との協働も多く、ここでは省いたが膨大なまちづくり、環境計画、デザインに携わっておられる。先生の活動は極めて多面的で全体像を描くことは容易でない。東京農大の学長としての6年間の成果の象徴的出来事は、当時800ちかい国公立大学の受験生数の前年度対比伸び率日本一になったことである。それを先生は「大学のマネジメントは、応用造園計画学だよ。」とおっしゃる。結局、先生には何事も「造園」でしかないようである。





下蒲刈、蒲刈大橋の防潮堤修景デザイン（伊藤邦衛設計部分）



下蒲刈、大地蔵の石組の施された防波堤



下蒲刈の人工海浜、梶ヶ浜ビーチ



朝鮮通信使時代の下蒲刈島歴史遺産、三之瀬の長雁木

進士五十八先生の仕事

主な著作(含、共編著)

- 『緑からの発想—郷土設計論』思考社、1983年。
- 『日本庭園の特質—様式・空間・景観』東京農大出版会、1987年。
- 『緑のまちづくり学』学芸出版社、1987年。
- 『アメニティ・デザイン—ほんとうの環境づくり』学芸出版社、1992年。
- 『自然環境復元の技術』朝倉書店、1992年。
- 『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法—農に学ぶ都市環境づくり』学芸出版社、1994年。(中国語翻訳書2008年刊行)
- 『ランドスケープを創る人たち』プロセス・アーキテクチャ、1998年。
- 『風景デザイン—感性とボランティアのまちづくり』学芸出版社、1999年。
- 『新作庭記—国土と風景づくりの思想と方法』マルモ出版、1999年。
- 『風景考—市民のための風景読本』マルモ出版、2002年。(朝日新聞全50回連載コラム「私の景観論」収載)
- 『庭園の島—ガーデンアイランド下蒲刈』マルモ出版、2003年。
- 『「農」の時代—スローなまちづくり』学芸出版社、2003年。
- 『日本の庭園—造景の技とところ』中公新書、2005年。
- 『ボランティア時代の緑のまちづくり—環境共生都市の実際』東京農大出版会、2008年。(中国語翻訳書2013年刊行)
- 『田園自然再生』農山漁村文化協会、2009年。
- 『わが国農業農村の再起』農林統計協会、2009年。
- 『グリーン・エコライフ—「農」とつながる緑地生活』小学館、2010年。
- 『日比谷公園—100年の矜持に学ぶ』鹿島出版会、2011年。
- 『地球社会の環境ビジョン—これからの環境学』日本学術協力財団・日学新書、2013年。

受賞(章)

- 1969年 「東京農業大学卒業論文・園地利用者の占有空間特性」で東京都公園協会奨励賞(井下賞)・東京農業大学学長賞
- 1984年 「自然の保護と開発の調和手法」で国立公園協会第5回田村賞
- 1989年 「日本庭園の特質に関する研究」で日本造園学会賞(研究論文部門)
- 2004年 「源兵衛川・暮らしの水辺」で土木学会景観・デザイン賞
- 2006年 日本農学賞・読売農学賞、日本公園緑地協会北村賞
- 2007年 「日本庭園研究ならびに一連の造園学研究」に紫綬褒章
- 2012年 『日比谷公園—100年の矜持に学ぶ』で日本生活学会今和次郎賞・日本造園学会特別賞

役職等

- 内閣観光政策審議会専門委員(1976～1977、1980～1982)
- 内閣国土審議会首都圏計画部会専門委員(1995～1998)
- 日本造園学会会長(1999～2001)
- 東京農業大学学長(1999～2005)
- 建設省都市計画中央審議会専門委員(1999～2001)
- 東京都世田谷区教育委員(2000～2012)
- NPO法人日本園芸福祉普及協会理事長・会長(2001～2009、～現在)
- 日本都市計画学会会長(2003～2004)
- 国土交通省国土審議会特別委員(2001～現在)
- 内閣府中央防災会議専門委員(2003～2005)
- 環境省ほか自然再生専門家会議委員長(2003～現在)
- 国土交通省社会資本整備審議会臨時委員(2004～現在)
- NPO法人美しく国づくり協会理事長(2005～現在)
- 日本学術会議会員・環境学委員会委員長(2005～2011)
- 日本野外教育学会会長(2006～2013)
- 自治体学会代表運営委員(2006～2012)
- 日本生活学会会長(2007～2010)
- 大日本農会副会長(2010～現在)
- 一般社団法人農ある暮らし研究会会長(2011～現在)

栗野 隆(あわの たかし)

1976年兵庫県生まれ。1999年東京農業大学造園学科卒業。2004年同大学院農学専攻博士後期課程修了。2004年～2010年国立文化財機構奈良文化財研究所研究員。考古遺跡や庭園跡の発掘調査とその保存整備・修理に従事する。2010年より東京農業大学造園科学科助教。造園史および文化財保存計画を専攻。博士(造園学)。これまで主導した遺跡および庭園の保存計画に「史跡但馬国分寺跡整備基本計画」(2011)、「旧齋藤氏別邸庭園保存管理・整備基本計画」(2013)など。